特別支援教育

特別支援学級を起点とした全校的な学びの基盤形成
～自立活動と教科学習、個別最適な学びを通した段階的な支援～

新潟市立鏡淵小学校
小林直子　H10 年度

情緒障がい特別支援学級の保護者の中には、「通常学級で学ばせたい」と転籍することを願いつつも、「支援学級の手厚いサポートがなくなって大丈夫か」という不安を抱えている方が複数いる。児童も同様で、力があっても「間違えるのが怖い」「みんなの前が不安」等、心理的安全性の不足と自己効力感の低下を抱えている。また、学校には多様なニーズをもつ児童が増え、そのニーズに応えきれていない指導の課題がある。障害種別による支援学級担任の負担の偏りも課題である。

この「特別支援学級の保護者・児童が抱える不安」と「学校全体の指導体制の限界」という二つの課題に対し、一つの仮説を立てた。それは、学級の枠を柔軟に考え、特別支援学級の専門性を全校の UDL に接続すれば、困難さを抱える児童も、安心して通常学級で主体的に学べるようになるのではないか。同時に、より多くの児童にとっても、「自分に合った学び方を選べる」という「個別最適な学び」の基盤が形成されるだろうということである。

そこで、特別支援学級の改革、転籍までの道のりを支える個の事例、学校全体へのアプローチを計画し、その柱として「自己認知・調整力」「自律主体性」「自己効力感」という児童の中に育みたい三つの要素を定義し、実践を進めた。

児童を中心に置き、自分に合った方法を試行錯誤する中で、主体的に踏み出す児童の変容が見られ、通常学級へ転籍をすることができた。そして、特別支援の専門性を全校に接続したことで、数値的変容も見られ、誰もが学びやすい学校の基盤が形成され始めた。今後も、自ら学び方を選択できる環境を学校全体でデザインすることこそが真のインクルーシブ教育であると考える。